

ピグミーという言葉の歴史： 古代ギリシアから近世ヨーロッパまで

北 西 功 一

History of the “Pygmy” : from the Ancient Greece to the Early Modern Europe

KITANISHI Koichi

(Received September 24, 2010)

1. はじめに

日本でピグミーという言葉を知っている人なら、中部アフリカの熱帯雨林に住む人たちのことを思い浮かべるだろう。そして、その人たちは、森の野生動植物を利用した狩猟採集活動をおこなっている、もしくはおこなっていた人たちだということも知っているかもしれない。私自身も彼らを調査している人類学者である。

ピグミーをそのように認識している人からすると、本稿のタイトルとサブタイトルは矛盾しているように見えるだろう。ピグミーが暮らしているのは中部アフリカであって、ヨーロッパではない。しかし、これらは矛盾していない。本稿で議論の対象となっているのは、ピグミーという言葉の歴史であって、現在ピグミーと呼ばれている人たちの歴史ではない。ピグミーという言葉は、現在ピグミーと呼ばれている人たちが使っていた言葉ではなく、古代ギリシアからその後のヨーロッパで使われていた単語で、それが19世紀後半から現在ピグミーと呼ばれている人たちの名称として用いられるようになったのである。つまり、ピグミーという言葉の歴史は、主としてヨーロッパにおいて展開してきたと言える。

本稿では、古代ギリシアにおいてピグミーの語源となる単語が使われだしてから、現在ピグミーと呼ばれている人たちがそう名付けられる前までの歴史を取り上げる。その歴史においてピグミーがどのような存在であると認識されていたのか、特に、世界における彼らの地位、つまり彼らは人間なのか動物なのか怪物なのか、そしてそれらの間の位置づけはどうなっているのかといった点について分析したい。そのような認識が、現在ピグミーと呼ばれている人たちの「発見」後、彼らにあてはめられていくことになるのだが、その部分については、執筆予定の本稿の続編でくわしく述べる予定である。

このような論文を書くきっかけとなったのは、ピグミーという名称が適切かどうかという問題について考えたことである。民族などの名称としては自称を用いることが望ましいが、ピグミーは自称ではない。また、もともと「コビット」を意味するピグミーという言葉は蔑称ではないかともいわれる (Hewlett 1996)¹⁾。ピグミーという言葉の歴史を簡単にまとめてこの問題を議論したのが北西 (2010) であるが、紙幅の関係上、粗い記述しかできなかった。この点を補うものが本稿と続編である。

また、ヨーロッパにおけるピグミー研究の本には、ピグミーに関する文献学的な研究があることも多く (Quatrefages 1969, Baliff 1992など)、この問題だけを扱った論文もある (Bahuchet

1993)。一方、日本ではピグミーという単語に関する文献学的な研究、もしくは海外の研究をきちんと紹介したものはほとんどなく、あったとしても非常に内容が薄く、ときには不正確なこともある。本稿はピグミー研究者としてピグミーという語を使う上で知っておくべき基本的知識という意味もあるだろう。

本稿では様々なピグミーという語に関する文献を取り上げているが、その文献の収集において最も参考となったのがBahuchet (1993)である。この論文は、ピグミーという単語の歴史、およびピグミーという単語が現在ピグミーと呼ばれている人たちにあてはめられていった歴史をとりあげたもので、本稿およびその続編のテーマと重なる。本稿はBahuchet (1993)でとりあげられている文献に直接あたり（日本語、英語の翻訳も含む）、Bahuchet (1993)では簡単にしか触れられていないものも含めて、それらの文献の文章を紹介しながら、その解釈を進めていく。また、本稿は、ピグミーが世界の中でどのように位置づけられるのかという視点で分析をしているが、これは中世ヨーロッパの怪物の歴史を描いたFriedman (2000)から発想を得ている。

なお、本稿では古代エジプトとピグミーの関係については述べない。ピグミーに関する多くの本で、「神の踊り子である小人のピグミーが、古代エジプトのファラオのもとに森の国からやってきた」といった表現がなされている。古代エジプトとピグミーの関係の考古学、歴史学的な研究およびそれが一般にどのような表現で紹介されてきたのかは、その時代のピグミー観の影響を受け、また逆に影響を与えてきており、とても興味深い。ただし、古代エジプトではピグミーかもしれない人はdngという単語で表され、ピグミーという単語とは直接関係ないので（北西 2010: 27）、本稿では触れないこととする。古代エジプトとピグミーの関係、および19世紀後半から現在に至るまでのその紹介のされ方については、本稿の続編でとりあげる予定である。

本稿では時系列に沿って、古代ギリシアから近世ヨーロッパまでピグミーの歴史をたどっていきたい。

2. 古代ギリシア

(1) ホメロスの「イリアス」

ピグミーという名称に直接つながる単語が使われている文献の中で最も古いのは、古代ギリシアのホメロスによって作られたと伝えられる叙事詩イリアスである。その第三歌の冒頭を引用しよう。

さて、両軍は、それぞれの大将の指揮の下に戦列を整え終わると、トロイエ勢は群がる鳥のごとく、喧しく叫びわめきつつ進む—その有様は、冬の嵐と激しい雨を逃れた鶴の群れが、小人族（ピュグマイオイ）に死の運命をもたらしつつ、啼き声も高らかにオケアノスの流れを目指して飛び、朝のまだきに仮借なき戦いを仕掛けていく、その鶴の叫びが天空の下に響きわたるさまにも似ていた。他方、アカイア勢は戦意を漲らせ、互いに助け合いながら戦わんと心中に期しつつ肅々として進む（ホメロス 1992: 87）。

イリアスの中でピュグマイオイ（Pygmaíoi）はこの一節にしか出てこないが、ここからわかることを考えてみよう。これはトロイア戦争において、トロイエ（トロイア）軍とアカイア軍が戦場に向かうシーンを描いている。「小人族」ピュグマイオイは、鶴の群れに襲われて殺

される人たちである。ピュグマイオイの語源はピュグメ (Pygmé) で、これは肘尺つまり肘から手首もしくは指の付け根までの長さを指す。ピュグマイオイはそのくらいの身長の人たちということである。つまり、体が小さく、鶴にも戦いで負けるような弱い人たちとされている。また、鶴は冬の嵐と激しい雨を逃れてピュグマイオイの土地に到達しているのも、冬の渡りの時期の話である。鶴は毎年ヨーロッパとアフリカを往復しているので、ホメロスがもしこの知識を持っていたなら、ピュグマイオイはアフリカ大陸のどこかに住んでいると考えていただろう。

(2) ヘロドトスの「歴史」

古代ギリシアの有名な歴史家ヘロドトス（紀元前485-425年）も「歴史」巻三37の中でピュグマイオイという単語を使っている。ヘパイトスの神殿にあった立像の姿は、フェニキア人が乗りまわしている三段橈船の船首に付けてあるパタイコイというフェニキアの神の姿に似ており、さらにパタイコイがピュグマイオイの姿の像であるという（ヘロドトス 1971：306）。Bahuchet（1993：154）は、これからピュグマイオイがねじれた脚を持つ異様な存在として認識されており、また立像の説明で使われていることから、人びとにピュグマイオイの姿は広く知られていたと述べている。

その一方で、ヘロドトスは、アフリカ内陸部に体の小さな人たちが住んでいるという話を「歴史」巻二32に載せている。ナサモン人というリビア系のたちが、シュルティス（リビア北方海岸の大砂州地帯）からその東方の地域にわたって居住している。その若者5人がリビアの砂漠地帯を探検し、これまで最も奥に行った人たちよりもさらに奥に行こうとした。彼らは、人の住む地域を通り過ぎて野獣の生息地帯に達し、これを越えてさらに砂漠を西に進んだ。幾日もかかって広大な砂漠地帯を抜けると、平地に樹木が生えているのが目に入った。駆け寄って樹上に生っている実をとろうとしたら、人並より背の低い人たちの一団が襲ってきて、彼らを捕えた。体の小さな人たちは広大な沼沢地帯を通してナサモン人を連行し、沼地をぬけるとある集落に着いたが、その集落に住む者たちはいずれも同じように背が小さく、肌が黒かった。この集落の傍らに大河があり、西から東に向かって流れていたが、その河中にはワニの姿が見えたという話である。ヘロドトスはこの大河をナイル川と推測している（ヘロドトス 1971：180-182）。

また、「歴史」巻四43には次のような話がある。サタスベスという人が、船でジブラルタル海峡を抜けて南に航海を続け、そして帰ってきて、王に対して報告をした。その内容は、自分の航海の最も遠隔の地点で体の小さな人の国を通り、この体の小さな人たちはヤシ（の葉または樹皮？）の衣服を用いており、自分たちが船で岸に近付くと、いつも集落を捨てて山中に逃げてしまったが、自分たちは集落に立ち入って乱暴を働くようなことはせず、ただそこから家畜だけを手に入れてきたというものである（ヘロドトス 1972：29）。

ヘロドトスはこの二つの話の体の小さな人たちに対してピュグマイオイという単語を用いていない。このことからBahuchet（1993：154）は、ヘロドトスが、ピュグマイオイは架空のお話の中の存在であり、それとは別に現実にアフリカには体の小さな人たちの集団が存在していると考えていたのではないかという。ヘロドトスのアフリカ内陸部の体の小さな人の話は、古代ギリシアの他の話や古代ローマ、中世ヨーロッパの話と比べて、最も現実的な話となっている。

(3) クニドスのクテシアス

次は、古代ギリシアのクニドスのクテシアス (Ctesias of Cnidus) を取り上げよう。彼は紀元前5世紀末から4世紀に活躍した医師・歴史家で、アナトリア西部のクニドス出身のためこう呼ばれる。彼はアケメネス朝ペルシャ帝国の大王ダレイオス二世 (在位: 紀元前423-404年) とアルタクセルクセス二世 (在位: 紀元前404年-358年) に仕えており、ペルシャ誌とインド誌を書いている (Encyclopædia Britannica 1988a: 771-772)。このインド誌の中にピグミーが登場するので、その部分を引用しよう²⁾。

インド中部には、ピグミー³⁾ と呼ばれる黒人がいて、彼らはその地域のほかの人たちと同じ言語を話している。彼らはとても背が低く、最も背の高い人でも2キュビット⁴⁾ しかなく、ほとんどの人は1.5キュビットしかない。彼らの髪は非常に長く、膝もしくはさらに下まで伸び、彼らのあごひげはほかの人たちよりも多い。彼らはあごひげが完全に伸びたら服を着るのをやめ、後ろは髪を膝の下まで伸ばし、前をあごひげを足元まで垂れさせる。彼らの体がこのように髪とひげで覆われると、彼らはそれを帯で止めて、服として使えるようにする。彼らはしし鼻で醜い。

彼らの羊は子羊よりも小さくなく、彼らの雄牛、ロバ、馬、ラバ、その他の荷物を運ぶ家畜は子羊のサイズである。

彼らは熟練した弓の使い手で、彼ら3000人がインドの王に仕えている。

彼らは公正で、インド人と同じ法律を持っている。彼らはノウサギや狐を狩猟するが、狩猟では犬は使わずに、オオガラスやトビ、カラス、ワシを用いる。

ピグミーがアフリカではなくインドに存在するという点、また鶴と戦うという話が出てこないという点が特徴である。もしかするとピグミーについてはいろいろな話があったのかもしれない。服の描写などの外見からは原始的で野蛮な存在とされるが、他のインド人と同じ言語や法律を持っていることが強調されているので、中身はある程度文明化された存在であると考えられている。この点は、次のアリストテレスとは異なる。弓の使い手というのは現実のピグミーと対応しているが、現実のピグミーからの情報ということはありません。偶然の一致だろう。古代ローマのプリニウスもピグミーの居住地をインドとしており、これをどのように考えるかはそこで述べよう。

(4) アリストテレス

古代ギリシアで書かれたピュグマイオイについての文献の中でもっとも有名なものは、アリストテレス (紀元前384-332年) の動物部分論だろう。

現にツルはスキュティア⁵⁾ の平野から上部エジプトの沼沢地 (ナイル川の水源地) まで移動するのである。(ここではピュグマイオイ [小人族] を攻撃するといわれている。つまり、この話は神話伝説ではなく、実際にそんな小人族一ヒトばかりでなくウマも一がいて穴居生活をしているということである。)(「動物部分論」第8巻12章597a、アリストテレス 1969a: 24)

アリストテレスもホメロスと同様に、鶴と戦う体の小さな人たちとしてピュグマイオイを取り上げている。さらに、鶴の渡りから、彼らが住んでいるところを上部エジプトの沼沢地で、そこがナイル川の水源地と考えている。実際のナイル川の水源地はもっと南であるが、当時の

知識からするとこのように考えたとしても不思議ではない。ヘロドトスの「歴史」巻二の22には、ナイル川が貫流している地方やその源に当たる地方に鶴が冬季に渡ることが述べられており（ヘロドトス 1971：175）、アリストテレスはこの記述からピグマイオイの住んでいる場所を推定したようである。

アリストテレスは、ピグマイオイが洞窟に住んでいると考えており、彼らを原始的な存在とみなしている。

アリストテレスは別のところでもピグマイオイを取り上げている。それは動物発生論第2巻第8章749aで、矮性のブタやラバが生まれるのは、子宮内で病気になり体に成長障害が生じることが原因であるという説明がある。そこでは、ピグマイオイも同じように妊娠中に諸部分がそこなわれ、体の大きさが切りつめられたものであるとしている（アリストテレス 1969b：199）。

アリストテレスは病理学的に体の小さな人たちをナノイ *nanoi* と呼び、ピグマイオイと区別しているようである。ナノイについての記述もいくつかあるが、動物部分論第4巻第10章686bによると、ナノイは上半身が大きくて下半身が小さく、幼児のような体型をしている。また、知性の面で普通の大人よりも劣るとされる（アリストテレス 1969a：388-389）。また、動物誌第6巻第24章557bには陰茎が大きいという記述がある（アリストテレス 1968：221）。これらの病理学的に体の小さな人たちの身体的な特徴とされるものは、この時代およびその後の時代に描かれるピグマイオイ（やピグミー）の姿に影響を与えている。

アリストテレスは、この話は現実の話であるとわざわざ述べており、これが後の時代にピグミーが実在すると主張する人たちの根拠の一つになっている。また19世紀後半にアフリカ熱帯雨林でヨーロッパ人探検家によって「発見」された体の小さな人たちにピグミーという名称を与えることになるのは、アリストテレスがピグミーの居住地をナイル川源流域としたことが大きな要因である。

(5) ピグマイオイの図像

鶴と戦う体の小さな人たちの話が古代ギリシアで広く知られていたことは、考古学からもわかる。主として、ギリシアのアルカイック期（紀元前8－5世紀）や古典期（紀元前6－4世紀）のアテネやコリント、テーベ、南イタリアの遺跡から発掘される壺の図柄に、ピグマイオイの絵が見られる⁶⁾。ただし、それは軟骨形成不全症によって体が小さい人たちに典型的な姿で描かれ、短い四肢、大きな頭、長い筋肉質の胴、太い腿、突き出たお尻という体型をしている。古代ギリシア人はアフリカの肌の黒い人たちも描いていたが、その描き方とはまったく異なる。描かれた人たちが病理学的に体の小さな人ではなくピグマイオイだとわかるのは、彼らが鳥と戦っているからである。このような姿にピグマイオイが描かれているのは、古代ギリシア人はアフリカにいる実際のピグミーを見たことがなく、自分たちの社会に存在する体の小さな人たちの姿からピグマイオイの姿を想像したためだろう（Dasen 1988：269-270）。

(6) 小括

古代ギリシアにおいてピグマイオイはかなり知られた存在であり、多くの人に取り上げている。身長が数十cmしかなく、鶴と戦うなど、非現実的な面もあるが、その姿は病理学的な成長障害の人として描かれており、その点では後で説明する中世ヨーロッパよりも現実的に考えている。彼らが野蛮な存在か文明的な存在かについては議論が分かれる。また、彼らは人間

であるようだが、この問題について突き詰めて議論したものはない。この点については古代ローマとも共通するので、そこで述べる。また、ヘロドトスの記述にあるように、アフリカ内陸部の体の小さな人たちの話は伝わっていたのだろうが、それが現在ピグミーと呼ばれている人たちのことなのかは不明である。残されている図像から、少なくとも直接的に現在ピグミーと呼ばれている人たちと接触してピグマイオイを考えていたわけではないと言える。

3. 古代ローマ

(1) プリニウスの「博物誌」

古代ローマでピグミーに言及している文献として有名なのは、帝政ローマ時代の博物学者・政治家・軍人であるプリニウス（23-79年）の「博物誌」である。この本は地理学、天文学、動植物や鉱物などの知識について記述している。また、ドラゴンやユニコーンなど多くの怪物が出てくる文献としても有名である。ピグミーは第7巻二(26-27)に登場する。その直前には、先人の文献や伝え聞いた話をもとにインドに存在する怪物的な存在、例えば、足が後ろ向きにつき両足とも指が八本ある人びと、犬の頭を持つ人びと、「傘脚種族」と呼ばれる脚が一本しかなく跳躍しながら動く人びと、首がなくて目が肩についている人びとなどが紹介されている。

それらの先、一番外側の山岳地域には三-span人⁷⁾と小人族がいるが、彼らは背丈が三-span⁷⁾を越すことはない。そこは北側が山脈によって守られているので、気候は健康的で常春のようだと。ホメロスは、この種族はまたツルに取り巻かれていると記している。こういうことが報ぜられている。春になると全員隊を組んで、弓矢を帯し、雌雄のヤギに乗り、一隊となって海に下ってゆき、ツルの卵と雛を食べる。そしてこの遠出は三カ月かかる。こうしなければ彼らは生長するツルの群れから身を守ることができなかった。彼らの家は泥と羽毛と卵殻でつくられると。アリストテレスは、それらの小人たちは穴居していると言っているが、彼の記述のほかの部分はほかの大家たちと一致している（プリニウス 1986：301）。

まず、彼らの存在する場所はインドである。これは古代ギリシアのクテシアスの記述と一致する。この部分では直接クテシアスについての言及はないものの、他のインドの怪物のところでクテシアスの文献を引用しているので、この部分もクテシアスを参考に行っている可能性はある。ちなみに、第8巻三八(92)には、ワニを狩猟している体つきの小さな「テンテュリタエ族」という人たちがナイル川に沿って住んでいるという話があるが、アフリカではピグミーについての記述はない（プリニウス 1986：363）。

弓矢を使うということもクテシアスと一致している。家畜を持っているというのはアリストテレスとクテシアスの両方にある。鶴との戦いについて、クテシアスは言及していないが、本文にも出てくるように、ホメロスとアリストテレスを参考に行っているようだ。最後に、アリストテレスの記述とは家の形態が異なる（穴居と、泥と羽毛と卵殻の家）。

これらのことから、当時コピトに関して様々な話が伝わっており、プリニウスはそれらを組み合わせてこの部分を作ったと思われる。また、当時インドは世界の果てと考えられており（Quatrefages 1969：5-6）、世界の果てには様々な怪物が存在し、そのような存在の一つとしてピグミーが描かれている。

博物誌は古代ギリシアの文献に基づいている部分が多いが、中世に古代ギリシアの文献が失われるにつれて、これが一般的な教養とみなされるようになった（Encyclopædia Britannica

1988b：520)。また、中世において最も権威ある科学書として読まれていたともいう（中野ら1986：1548）。プリニウスの博物誌はその後数世紀の百科事典の編纂者によって広く利用されることとなる。

(2) ポンポニウスのメラの「地方地誌」

ローマの地理学者ポンポニウスのメラ（Pomponius Mela）⁸⁾は紀元43もしくは44年に書かれたde Chorographia（地方地誌）において、ピグミーを取り上げている。場所は世界の端にあるアラビア海沿岸から内陸に入った地域である。そこには以前ピグミーが住んでいて、彼らは作物を植えていたが、その作物をめぐる鶴と戦い、その結果絶滅してしまった。またそのまわりには蛇を食べる人たちや500年生きるフェニックスという鳥がいるという（Romer 1998：124）。鶴と戦うピグミーというテーマは他の話と一致するが、すでに絶滅してしまっているという点が他とは異なる。

彼のアフリカについての記述で、エチオピアには豊かな人たちのほかに、彼らと体格で似ておらず彼らよりも小さくて粗野な人たちがいて、また彼らのテリトリーにはナイル川の源と思われる泉があるとされるが、その人たちにピグミーという単語は使われていない（Romer 1998：128）。

(3) 小括

細かい点ではいろいろな違いはあるものの、プリニウスやポンポニウスのメラともに、ピグミーはアフリカではなくアジア、しかもその端の地域に存在すると考えていたようである。アジアの端というピグミーの居住地は中世ヨーロッパでも場所を変えながらそのまま維持される。その世界の果てにいろんな種類の怪物がいて、その一つがピグミーであるという点も一致している。

ただし、彼らが人間であるかどうかという議論は、古代ギリシアと同様に、なされていない。その理由としてFriedman（2000：87）は、彼らがエキゾチックな好奇心の対象にすぎなかったことと、彼らが「市民」以外の人たちの起源に関心を持たなかったことをあげている。この点は次に述べる中世のキリスト教神学者とはかなり異なる。

4. 中世ヨーロッパ

(1) アウグスティヌスの「神の国」

中世ヨーロッパでも多くの人々がピグミーを取り上げている。まず、神学者・百科事典編纂者から取り上げよう。百科事典編纂者の多くは神学者でもある。

初期キリスト教の西方教会最大の教父で、正統派教義の完成者とされるアウグスティヌス（354-430年）もピグミーについて言及している。それは「神の国」第16巻第8章「怪物のような人間たちも、アダムあるいはノアの子孫に属するののか」においてである。額の真中に眼があったり、踝より下の部分が脛に後向きについていたり、口がない怪物などについて述べた後、次のようにピグミーを説明している。

またあるものは身長が一キュビトで、ギリシア人はこの人々をキュビトにならってピグマイオス⁹⁾と呼んでいる。ある地方では女は五歳で妊娠し、八歳以上生きることはない（アウグスティヌス 1980：119）。

アウグスティヌスは、プリニウスの博物誌などにならって、他の怪物と同列の存在としてピグミーを描いている。怪物たちの紹介の後、彼らが存在する理由について述べている。

しかし、あの不思議な記事に記されている種族が人間であるとしよう。神がいくつかの種族をもこのように創造しようとしたのは、わたしたちのもとに人間から生まれてくるこれら奇怪な人々の場合、神が英知をもって人間の本性を形造られる際に、その英知がいわば未熟な職人の技術のように間違いをしでかしたのだ、とわたしたちが考えないためであったとすればどうであろうか。それゆえ、おのおのの種族の中に怪物のような人間がいるのと同様、人類全体の中に怪物のような種族がいても、わたしたちは不合理と見るべきではない。・・・いくつかの種族について書かれているこれらのことは、何ら実在しないか、あるいは実在するとすれば、彼らは人間ではないか、あるいはもし人間であるならば、彼らはアダムから出たものである、と（アウグスティヌス 1980：122）。

アウグスティヌスにとって問題なのは、万物の創造主である神がピグミーなどの怪物的存在をなぜ造ったのかということである。その答えは、このような存在は、人間の集団の中に異常な形を持つ人たちが生まれてきたとしても、それを神の失敗作と人間が考えないようにするためであるというものである。最後の一文にあるように、ピグミーを含めた怪物が、アダムに由来する人間である可能性も認めているが、断言はしていない。

(2) セビリャのイシドールス

中世初期の神学者セビリャのイシドールス（Saint Isidore of Seville, 560-636年）は彼の主著である「語源」（Etymologiae）でピグミーを取り上げている。語源は百科事典的な著作で、その一章が怪物monstrumに充てられている（Friedman 2000：112）。そこでは、ピグミー、巨人、2つの頭を持つ人、女性が5歳で妊娠し8歳で死ぬ人種はインドの山岳地帯近くに住んでいるという記述がある（Bahuchet 1993：156）。

イシドールスは、ピグミーを含めた怪物は神によって作られ、神が怪物を作った理由を、怪物はこれからすぐに現れるかもしれないことの前兆となる何かを示しており、神は今も昔も欠陥のある生き物や新しく生まれた生き物を通して、これから起こる出来事を伝えようとしていたからだとしている。そして、彼はピグミーが身長が足りないという欠陥を持つ存在であるという（Friedman 2000：112）。

(3) カンタンプレのトマス

中世中期の百科事典にも必ずと言っていいほどインドの怪物の章が存在するが、その例として、カンタンプレのトマス¹⁰⁾（Thomas of Cantimpré, 1201-1270/72）のDe Naturis Rerum（1240）があげられる。この中では、プリニウスの博物誌に出てくる怪物が動物、鳥、魚、海の怪物に分けて扱われ、その中にピグミーが登場する。「ピグミー（pigmei）の人たちはインドの山に住み、背丈は2キュビトで、鶴と戦い、3歳で子供を生み8歳で老いる」とされている¹¹⁾。

次に述べるアルベルトゥス・マグヌスと同様に、トマスは、これらの怪物たちは理性を持っていないと考えていた。「いくつかの行動によって、彼らは外見上理性を持っているように見えるけれども、彼らは感覚によって認識したことから知的に思考するために必要な身体的器官

を持っていない。」と述べている (Friedman 2000 : 183)。

(4) アルベルトゥス・マグヌスとスコラ学者

中世中期には、聖大アルベルトとも呼ばれるドイツの神学者・スコラ学者で、トマス・アクィナスの師であるアルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus、1193/1206-1280) も「動物について (De Animalibus)」の中でピグミーを取り上げている。

彼は、「存在の大いなる連鎖The Great Chain of Being」において、ピグミーをサルと人間の間に置いた。つまり、ピグミーを人間より下位の別の存在であるとした。彼は、人間であるためには理性を持っているということが最も重要であり、ピグミーにはその理性が欠けていると考えた。そのころ、ピグミーは体こそ小さいものの、言語を持ち、道具を使い、農耕をおこない、社会的な組織を持っているとされていたが、それらは彼にとってピグミーの理性を認める条件にはならなかった。言語については、ピグミーは理性を通して話しているのではなく、自然の本能として話しているのであり、動物の鳴き声や幼児の泣き声と同じレベルのものであるとした。また、社会的な慣習や服の使用については単なる模倣にすぎず、理解せずに行っているとした。そして、ピグミーは理性が欠けており、理性を模倣しているだけで、一般概念を理解できず、三段論法も使えず、そのため物事の本質を理解できず、論理的な思考はできないとしている (Friedman 2000 : 191-192)。

結論として、「ピグミーと呼ばれる動物は、理性を用いず、上品さや道義心の感情もない。彼らは正義をあげることなく、社会の徳を実践することもない。彼らは多くの点で人間をまねし、言葉と会話能力を持っているが、それらは不完全な形で持っているにすぎない」 (Friedman 2000 : 191) ¹²⁾。

トマス・アクィナスの弟子であるオーヴェルニュのピーター (Peter of Auvergne、1304年死去) は、「ピグミーは人かどうか」というタイトルで論を展開している。これは、ピグミーが人間であるという説を紹介し、それに対して反論するという形式になっている。例えば、ピグミーは太陽が昇るときその方向に進み、昇る太陽に拍手をし、崇敬を示すという話があり、この行動は彼らが信仰を持っていることを示しているのではないかという。これに対して彼は、太陽が昇るとそれによって彼らの体は温まり、彼らの精神は活発なり、これらの感覚的な満足によって彼らは動き、拍手しているように見えるのだと説明している。さらにこのような行動は多くの動物にも見られ、植物でさえも太陽が昇ると葉や花を開き、沈むと閉じるものがあるという。彼もアルベルトゥス・マグヌスと同様に、そのような行動は一般概念を生み出す理性に基づくものではなく、感覚や知覚される特定のものから生じるとしている (Friedman 2000 : 194-195) ¹³⁾。

このように、ピグミーは、この時代のスコラ学者・神学者によって、人間を除けば生物として最も上位ではあるものの、人間には含まれず、人間よりも下位の存在として位置づけられている。そしてそれは理性の欠如が理由である。

(5) 探検家・旅行家の出現

このような百科事典編纂者や神学者に加えて、もう一つの重要なピグミーの語り手は探検家・旅行家である (Bahuchet 1993 : 158)。ピグミーを含めて怪物的な存在は通常世界の果てに存在するとされていた。それはある意味当然で、簡単に行き来できる場所なら、怪物的な存在がないことがわかってしまう。未知の世界に未知の生物や人たちが存在するのである。

13世紀になると、王や教皇に派遣された修道士がアジアを旅行した。彼らは知識人であり、文献に記述された怪物の知識を持っていて、その存在を確認するという事は旅行の目的の一つとなった。しかし、彼らは怪物を見つけることはできなかった。フランシスコ会の修道士リュブルークのウィリアム¹⁴⁾ (William of Rubrouck, 1213/15-1293/95) は、1253年にコンスタンチノーブルを出発し、1254年には中央アジアのカラコルムに滞在している (Herbermann et al. 1913: 217)。彼は、ソリヌス¹⁵⁾ やセピリヤのイシドールズが書いた怪物を探して現地の人たちに尋ねたが、現地の人たちはそのような存在を知らないと言い、驚いたり、存在を疑うような人たちの話を全く聞かなかったと述べている (Bahuchet 1993: 158)。しかし、旅行者の中には、次に述べるように、ピグミーもしくはピグミーのような人たちの話を語る人もいた。

(6) ポルデノーネのオドリコの「東洋旅行記」

フランシスコ会の修道士オドリコ¹⁶⁾ (1265/1286-1331) は14世紀前半にインドから中国を訪れている。オドリコは中国(当時は元)の南京について書いている章でピトゥイニ¹⁷⁾ という「小人族」に触れている。

チレンフ市(注:南京)を發つてわたしはタライ(注:長江)と呼ばれる大河に出たが、この河は世界最大の大河で、一番狭い部分でも七マイルの幅は充分ある。この河は小人族すなわちピトゥイニ人達の土地を貫流し、彼等の都市はカタン(場所は不明)と呼ばれている。このカタン市は世界にある都市の中で大きく美しいものの一つである。ここの小人族は背丈が3指尺しかないが、彼等は世界のどの人々よりも大きな綿糸業すなわち綿の仕事をする。また小人族の中の大きい女は、非常に小さな小人の半分よりは丈の高い大きな子を生む。女の子は五歳で結婚させられる。それゆえこれらの小人から生まれる者は数え切れぬほどいる。これらの小人族は男女ともに丈が低いことで有名である。しかし、彼等は我等と同様に理性を備えた靈魂を持っている(オドリコ 1966: 106-107、()内は訳注を抜粋)。

オドリコは、中国の小人族が非常に小さくて若くして成熟するにもかかわらず、理性を備えた靈魂を持った存在、つまり人間であるとしている。また、綿糸業を行うことから文明的な存在とみなしている。この点は前述のアルベルトゥス・マグヌスやカンタンプレのトーマスとは異なる。

(7) マンデヴィルの「東方旅行記」

この時代にアジアの旅行記を残した人として有名なのはマンデヴィル (Sir John Mandeville) だろう。ただし、これは、当時伝わっている話を組み合わせる編集された旅行記で、旅行者かつ作者とされた架空の人物がマンデヴィルであり、その中国の部分は上記のオドリコの旅行記を参考にして書かれている。この旅行記は1360-70年ころに出版された。この本はヨーロッパでとても人気を博し、版を重ねた(家入 1966: 199、大場 1964: 285; 293、Bahuchet 1993: 159)。「小人」(英語ではpigmy)の話の部分を書きよめよう。

ところで、このダライ河は背丈の低い小人の国のまっただ中を貫流している。小人の背丈はわずかに3指尺(1指尺は約9インチ)しかないが、たいへんきれいで、よく均衡のとれた体をしている。彼らは生まれて半年もすると結婚し、子供を生む。そして、ふつう寿命は七、八年くらいである。

もし九年も生きると、ひどい老人とみなされる。

彼ら小人は絹や綿をまこと巧みに加工し、そのほか精妙な工芸品を、ほかの者よりもはるかに精巧に、作りだす。それから、一般に彼らは鶴と戦い、いつもこれと戦って、殺しては、その肉を食べる。彼らは土地を耕すとか、そのほかの重労働にはたずさわらない。彼らのあいだに、なみの背丈の人間らが出て、この者たちが土地を耕したり、ブドウ樹の手入れをしたり、また、小人たちに必要な、いっさいの重労働をやっけてのけたりする。われわれが巨人を怪しむように、彼らも大男に対し軽蔑と驚異の念を抱いている。この国にはとりわけ美しい都があって、そこにこれらの小人は大勢住んでいる。大汗は支配者であるから、この都を驚くほど立派に管理させている。なお、これらの小人は、体こそ小さいが、年齢相当に分別もそなわり、とても利口で、善悪を区別することもできる（マンデヴィル 1964：172）。

ここで出てくるダライ河はオドリコがタライ河とした長江であり、話の内容も前述のオドリコの話とかなり重なる。オドリコでは小人の女性が5歳で結婚していたのに対して、マンデヴィルでは半年で結婚している点は異なるが、訳者はマンデヴィルがほかの資料を使って作り話を書いたと考えている（大場 1964：178）。鶴との戦いはホメロスから継続しているテーマであるが、実際にはプリニウスの博物誌やそれ以降の文献などを参考にしているのだろう。

オドリコも「小人」を理性をもった人間としたが、マンデヴィルは分別を持ち利口な人々であることに加え、普通の大きさの人間に労働をさせており、「小人」の国では「小人」のほうが社会的な地位が上とされている。体が小さいにもかかわらず、完全な人間であり、この地域の文明を担う存在としてピグミーが描かれているのが、マンデヴィルの旅行記の特徴であり、これまで人間ではないもしくは人間であったとしても野蛮人であるとされてきたものとは全く逆である。

(8) 小括

アウグスティヌス以来、神学者にとって重要だったのはピグミーを含めた怪物が実在するか架空の存在なのかという問題ではなく、この世界における位置づけであり、人間なのか、動物なのかということであったようだ。彼らにとってその決め手となるのは、姿形ではなく、魂もしくは理性を持っているかどうかであった。カンタンプレのトマス、アルベルトゥス・マグヌス、オーヴェルニュのピーターは、ピグミーは魂や理性を持っておらず、人間よりは下位の地位にあるが、他の動物よりは高い地位にあると考えていた。一方、旅行記を書いたオドリコやマンデヴィルは、ピグミーが理性を持ち、文明的な人間であるとしている。娯楽を目的とした旅行記ではより読者受けしそうな話が好まれたのだろう。キリスト教神学やスコラ学の思想家による公式な見解としては、ピグミーは存在の大いなる連鎖において人間とサルの上に位置するものの、人間には含まれなかった。

5. 大航海時代とルネサンス

15、16世紀になると、プリニウスが描いたような怪物が実在するのか疑問がもたれるようになった。Friedmanによると、これには二つの理由が考えられるという。大航海時代の到来によってアジアやアフリカに旅行する人たちが増えたが、そのような怪物を発見することはなかったということと、ルネサンスにおける経験主義的な傾向である。ただし、旧大陸に比べると新大陸は未探検であり、そこに怪物がいるのではないかという期待があった。しかし、そこでも怪

物は発見できず、失望することになる。例えばコロンブスが1492年に初めてアメリカに行ったとき、彼はガイアナ生まれの人と出会い、彼らが怪物のような姿をしていないことに驚いた。コロンブスは、インディアンは立派な体と素敵な顔を持ち、彼らは一般的にかなり背が高く、見栄えがよいと記している。のちに、スペイン国王と女王に対する手紙の中で、アメリカには怪物はおらず、野蛮な人たち *savage men* がいるだけだと述べている (Friedman 2000 : 198-199)。

16、17世紀には、ピグミーが現実の存在なのか架空の存在なのか、という議論が盛んにおこなわれた。上記の理由で空想の産物にすぎないという学者も多かったが、実在するという学者もあり、古代からの百科事典的な書物における怪物のリストに必ずピグミーが載っているというのをその根拠とする人もいた (Bahuchet 1993 : 160)。

この時期にピグミーを取り上げた人として有名なのは、16世紀前半に活躍した医師・錬金術師のパラケルスス (1493-1541) である。彼は一般に「妖精の書」と呼ばれる著作の中でピグミーについて述べている。この本の正式の題名は「水の精 (ニンフ)、風の精 (ジルフ)、土の精 (ピグミー)、火の精 (ザラマンデル) その他精霊の書」(Liber de Nymphis, Sylphis, Pygmaeis et Salamandris et de caeteris Spiritibus) である。ここでは、ピグミーは土の中に住む精霊である。これらの精霊は、姿、形、話し方、振る舞いが人間に似ていて、物を使用したり知恵を用いたりする理性を備えている。ただし、魂は持っていないので、人間ではなくて獣とされる。しかし、あらゆる動物の中で最も人間に近い存在である (大橋 1976 : 180-182)。理性の有無に関してはアルベルトゥス・マグヌスなどと異なるものの、人間と動物の中での位置づけは一致している。

実は、この時代、今日ピグミーと呼ばれる人たちの記録が残っている。1600年、イギリス人の船乗りアンドリュー・バテル (Andrew Battell) は、「Mani Kesockの国の北東にMatimbasと呼ばれる小さな人たちがいて、彼らは12歳の少年よりも大きくないが、ずんぐりした体形で、肉だけを食べて生きており、弓矢を使って森で獲物を狩っている。彼らは貢物をMani Kesockに支払い、象の牙と尾を彼に持ってきていた。」という (Ravenstein 1901 : 59)。場所は現在のガボンあたりだと思われる。この時代からすでに象のハンターとして活躍していたことが分かるが、バテルは彼らをピグミーとは呼んでいない。彼らは体は少し小さいものの完全な人間であり、当時のヨーロッパ人が想像していた怪物としてのピグミーとはかなり異なっていたためだろう。一方で、バテルは2種類の怪物 (monsters) がこの地にいるとしているが、それはチンパンジーとゴリラである (Ravenstein 1901 : 54)。

6. 類人猿の発見

17世紀には、アフリカとアジアからの新しい情報によって、ピグミーの存在についての新たな可能性が開けてきた。類人猿が発見されたのである。

類人猿にピグミーという名称を与えた研究者で有名なのは、イギリスのタイソン (Edward Tyson, 1650-1708) である。彼は当時イギリスで最もすぐれた比較解剖学者とされていて、1698年にアフリカからチンパンジーの死体がロンドンに到着したとき、その解剖は彼にまかされた。その結果が1699年に彼の著作として発表された。ただし、この本は二つの部分からなっており (Montagu 1944 : 84)、本のタイトルにそれは表われている¹⁸⁾。

前半のタイトルは「オランウータン (Orang-Outang) もしくは *Homo sylvestris*¹⁹⁾、ピグミー (Pygmie) の解剖学：サル、類人猿、人間と比較して」であり、ロンドンにやってきたチン

パンジーの死体の解剖して、サルや人間と比較したもので、その結論は、これは人間ではないが、人間に最も近い動物であるというものだった。

彼がこの動物をピグミーと名付けた理由が述べられているのが後半部である。そのタイトルは「古代の人たちのピグミー、犬頭人 (Cynocephali)、サチュロス (Satyrs)²⁰⁾、スフィンクスに関する文献学的論文。そこでは、それらが以前ヒトであると偽られていたが、ヒトではなく、類人猿もしくはサルであることが見えてくる。」つまり、タイソンは古代の人たちがサルや類人猿をヒトと見間違っただけでピグミーと名付けたと考えて、アフリカから運ばれてきた動物にピグミーという名前を付けたのである。

1758年にイギリスの博物学者エドワーズ (George Edwards, 1694-1773) は *Gleanings of Natural History* (自然誌の拾遺集) という本を出版し、その中で体に濃い毛が生える病気の少年²¹⁾の項目の次に、森の人 (The Man of the Woods) を取り上げている。そこでは、この動物はサルの仲間であるが人間に外見上もとても似ていて、タイソンがピグミー (Pigmy) と呼んだ動物と同じ動物であると述べている。また1718年にボルネオを旅した人がこれに似た生物を記述していて、現地語で *Oran Ootan* と呼ばれ、森の人を意味するが、これは同じではないという。ただし、この動物の図²²⁾の下には *Pigmy*, *Orang-outang*, *Chimp-anzee* というメモがある (Edwards 1758: 6-9)。これら3つを同じような動物と考えていたことがうかがえる。結局、現在のオランウータンの学名は *Pongo pygmaeus* となっている。

フランスの博物学者ビュフォン (Comte de Buffon, George-Louis Leclerc, 1707-1788) は「鳥の博物誌 (*Histoire Naturelle des Oiseaux*) の第7巻の鶴の章で、ピグミーを取り上げている²³⁾。ビュフォンは、ピグミーが鶴と戦う、というアリストテレスやプリニウスを紹介し、この話が不合理なものであるとしている。その一方で、この話が広まっていることからすると、この話には何らかの真実が隠されていて、単なる空想として片付けるべきではないともいう。ビュフォンによるこの話の解釈は、ピグミーとされた存在はサルであり、群れをなすサルが集団で鳥と戦っているようすが人間と似ていたため、わずかしき教育を受けていない人や、遠くからちらりと見ただけの人、異常なことに興味を持つ人、自分の旅行記に不思議な現象を書きたい人にとって、サルが小さな人の集団に見えたというものである (Buffon 1770-85: 290-292)。

啓蒙主義の時代において、コビトや怪物としてのピグミーは神話、伝説、架空の物語の中だけに存在するものであり、その起源は昔の人たちが類人猿やサルを誤って認識したものであると、博物学者たちは考えたのであった。当時の彼らの持っていた情報だけから考えるとしたら、彼らの結論は私にも合理的に思える。

ただし、彼らの類人猿の位置づけは、タイラーが述べているように、人間よりも下位の存在であるが、獣の中で最も人間に近いというもので、これはエドワーズの著作の中の類人猿の記述の順番にも表されている。この位置づけは中世の神学者と同じである。

7. おわりに

ピグミーという言葉、もしくはその元となる言葉が使われだしたのは古代ギリシアである。古代ギリシアのピグマイオイは病理学的に体の小さな人たちの姿が想定されており、この点からすると現実的に描いていると言える。しかし、古代ローマから中世におけるピグミーは、プリニウスが描いた怪物たちの一つとなり、様々な姿と生活様式を持つ存在として描かれるようになる。そして、18世紀には類人猿にピグミーという名称が与えられた。

古代ギリシアから中世ヨーロッパにおいて、ピグミーの存在を明確に否定する人はあまりいなかった。多くの人は、ピグミーが世界のどこかに存在すると考えていたのである。アリストテレスは実在を断言し、中世の神学者たちは存在を断言はしないまでも、存在する可能性を認めていた。

古代ギリシアや古代ローマでは、彼らが人間かどうかという問いは議論されることがなかった。文明的な存在かどうかは人によって異なる。アリストテレスは穴居生活をしているなど原始的な存在と考えているようだが、クテシアスは外見こそ服を着ないなど原始的であるが法律を持っており、ある程度文明的な存在であると考えているようだ。プリニウスの博物誌では、家の作りは原始的であるが、隊を作って鶴を攻撃しており、社会秩序があるようだ。

彼らを文明的な存在、理性や魂を持った人とみなすか、野蛮な存在、理性や魂を持たない獣の仲間とみなすかという点は、中世のキリスト教神学者にとって重要な問題であった。彼らはピグミーが実在するか否かよりも、この点について考えを巡らせている。それは、神が創った世界において、神、人間、獣などと並んでピグミー、もしくは怪物がどこに位置づけられるのか、そして神はなぜそのような存在を創造したのかという問いでもある。アウグスティヌスとイシドールスは、その答えは全く違うものの、二つめの問いに答えている。

のちにピグミーと呼ばれる人たちが発見されたときに彼らに与えられたイメージに大きな影響を与えることになるのは、一つめの問いである。アルベルトゥス・マグヌスに典型的に見られるように、キリスト教の人間中心主義的な世界観（井野瀬 2009：72）の中で、ピグミーは人間より下位でありつつも、獣の中では最上位の地位を与えられた。そして、ピグミーは理性（もしくは魂）を持たない存在であるとされた。

逆に考えるなら、このようなピグミー（もしくはその他の怪物的存在）の位置づけから、当時のヨーロッパの人たちの世界観の内実を知ることができる。彼らはどうしてもピグミーを人間と認めたくなかったようだ。神が自身に似せて創造した存在としての人間の地位を特別なものであると考え、人間と獣を厳密に区別し、ピグミーは人間に似た存在ではあっても決して人間ではなく、あくまでも獣のグループの一員であった。ピグミーの位置づけは、このような人間中心主義的な世界観を浮き彫りにするものとしてみることもできるだろう。

人間に似た存在であっても人間ではなくて獣であるという位置づけは、近世ヨーロッパにおいて発見された類人猿にまさにぴったりのものであった。類人猿にピグミーという名称が与えられたのは当然のことだったと言えるかもしれない。

17世紀にアフリカの海岸部で現在ピグミーと呼ばれている人たちの話を聞いた船乗りバテルは、彼らをピグミーとしなかった。また、19世紀後半にガボンでピグミーに出会ったデュ・シャージュ（Du Chaillu）も当初は彼らをピグミーと呼ばなかった。彼は他の人の指摘を受けて初めて彼らをピグミーと呼んだのだった（Bahuchet 1993：163）。これはその時代にピグミーという単語が持っていたイメージと実際のピグミーがかなり異なっていたことを示しているのだろう。その歪みがピグミーが人間であるのか、半人半獣的な存在であるのか、獣なのかという議論を生むことになった。ヨーロッパに連れてこられたピグミーは身体計測や能力テストを受けることになる（Quatrefages 1969：163）。そして、テストの結果、人間であるとされたものの、最も「原始的な」人間というイメージを与えられることになるのだが（Bahuchet 1993）、それは続編のテーマである。

一方で、主流ではないものの、マンデヴィルの旅行記のように、ピグミーがまわりの人たちと同等もしくはより優れている存在として描かれることもある。肯定的に評価されるという点

では、のちの「高貴な野蛮人 Noble Savages」と似ている。しかし、「高貴な野蛮人」では文明（もしくは西洋近代）の鏡像としての素朴さや非暴力性、自然との調和などが評価されるのであって、マンデヴィルの評価では身体的特徴はヨーロッパ人と正反対であるものの、評価されているのはあくまでもピグミーの文明的な側面である。「高貴な野蛮人」はあくまでも「原始的」で「野蛮」な存在であり、その点では中世の神学者からのピグミーのイメージともつながっている。これらも続編のテーマとなるだろう。

今後、執筆予定の本稿の続編では、このような長い歴史と複雑に入り組んだイメージを持つピグミーという言葉が、アフリカ熱帯雨林に住む人たちに適用される過程と、その人たちがどのようにヨーロッパ人によって認識されていったのかについて述べていく予定である。

注

- 1) アフリカ熱帯雨林に点在する狩猟採集民をピグミーとしてひとまとめに扱ってよいのかという議論もある。詳しくは北西（2010）を参照。
- 2) ただし、クテシアスのもとの本は散逸してしまい、後の人に引用されたものが断片的に残っている。ここで出した文章は、コンスタンチノーブル総主教フォティオス（820?-891）が書き残したものをJ. Lenderingが英訳し（Photius' excerpt of Ctesias' Indica. http://www.livius.org/ct-cz/ctesias/photius_indica.html）、それを私が日本語に訳した。
- 3) Lenderingの文章ではPygmiesと表記されている。フォティオスが書き残した文章のもとの単語はわからないが、多分ラテン語で書いていると思われるので、ピュグマイオイではなく、ラテン語でピグミーにあたる単語を書いているのだろう。
- 4) キュビットは肘尺を意味し、1キュビットは46~56cm。
- 5) スキュティアはスキュタイ人の国で黒海の北岸および西北岸である。
- 6) 実際の絵はUn Monde de Pygméeウェブサイト (<http://www.unmondepygmees.com/les-pygmees-de-lantiquite.php>) で見るができる。
- 7) 1スパンは約25cm（プリニウス 1986の訳注）。
- 8) メラ自身についての情報はあまりなく、生没年は不明である。スペインの地中海岸でイタリア人の家族に生まれ、のちにローマに出てきて、de Chorographiaを執筆した（Romer 1998：14）。
- 9) ピュグマイオスはピュグマイオイの複数形。
- 10) カンタンブレのトマスはフランドル地方のドミニコ会修道士である。
- 11) 原文はラテン語でFriedman（1974：128）にある。
- 12) アルベルトゥス・マグヌスの原文について、Friedman（2000）は、Stadler（1916, 1920）を参照している。
- 13) Friedmann（2000）は、ここにあげたオーヴェルニュのピーターの議論を、Koch（1931）で編集されたラテン語の文章をもとに引用している。
- 14) リュブルークのウィリアムは北フランスのRubroucで生まれたのでこう呼ばれる。
- 15) ソリヌスは、3世紀もしくは4世紀に活躍した古代ローマの百科事典編纂家で、主著はDe mirabilibus mundi（世界の驚異、Collectanea rerum memorabilium、Polyhistorと呼ばれることもある）で、この著作はプリニウスの「博物誌」に多くの部分を負っている（Petroff 2007）。
- 16) イタリアのポルデノーネPordenoneで生まれたのでポルデノーネのオドリコ、英語では

Odoric of Pordenoneと呼ばれることが多い。

- 17) オドリコの話したことは、ラテン語、イタリア語、フランス語で残っており、しかも多くの版がある(家入 1966:194-198)。昔のフランス語版では、ピドゥイニがPymainとなっており、こちらのほうがよりピグミーを思わせる (Bahuchet 1993 : 159)。
- 18) 実際の表紙はMontagu (1944 : 87) にある (<http://www.jstor.org/stable/458846?seq=4>)。
- 19) この少し前に、オランダ人医師によってジャワ島で大きなサルが観察され、彼らによってマレー語をもとにオランウータンと名付けられ、マレー語の意味通りに学名でも*Homo sylvestris* (*sylvestris*は森を意味するので森の人) とされた。
- 20) ギリシア神話に登場する半人半獣の存在。
- 21) ピグミーとは直接関係ないものの、ここに体に濃い毛が生える病気の少年が位置づけられていることは興味深い。大航海時代以降、プリニウスが描いたような怪物はどこにも存在しないことが知られるようになったが、その一方で新世界の住人と同一視されたのは、毛むくじらの野生人 (wild man) もしくは野蛮人 (savage man) というイメージである (Friedman 2000 : 200)。体に濃い毛の生える病気の少年は、その野生人 (もしくはそれに近い存在) としてあげられているのだろう。
- 22) Digital Library for the Decorative Arts and Material Cultureのウェブサイトでこの図を見ることができる (<http://digicoll.library.wisc.edu/cgi-bin/DLDecArts/DLDecArts-idx?type=turn&entity=DLDecArts.NatHistEd05.p0027&id=DLDecArts.NatHistEd05&isize=M>)。
- 23) 原文はウェブ上で閲覧可 (Histoire naturelle des oiseaux : <http://buffon.oiseaux.net/>)。

参考文献

- アウグスティヌス 1980 『アウグスティヌス著作集14「神の国」(4)』(大島春子・岡野昌雄 訳) 教文館。
- アリストテレス 1968 『アリストテレス全集7 動物誌 (上)』(島崎三郎 訳) 岩波書店。
- アリストテレス 1969a 『アリストテレス全集8 動物誌 (下)・動物部分論』(島崎三郎 訳) 岩波書店。
- アリストテレス 1969b 『アリストテレス全集9 動物運動論・動物進行論・動物発生論』(島崎三郎 訳) 岩波書店。
- Bahuchet, S. 1993. L'invention des Pygmées. *Cahiers d'Études Africaines* 33 (1) : 153-181.
- Baliff, N. 1992. *Les Pygmées de la Grande Forêt*. Editions L'Harmattan, Paris.
- Buffon, G.-L. Leclerc, comte de, 1770-85. *Histoire Naturelle des Oiseaux*. Imprimerie Royale, Paris.
- Dasen, V. 1988. Dwarfism in Egypt and classical antiquity : iconography and medical history. *Medical History* 32 : 253-276.
- Edwards, G. 1758. *Gleanings of Natural History, Exhibiting Figures of Quadrupeds, Birds, Insects, Plants, etc. Most of Which Have Not, Till Now Been Either Figured or Described*. Royal College of Physician, London.
- Encyclopædia Britannica 1988a. *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 3. Encyclopædia Britannica, Chicago.

- Encyclopædia Britannica 1988b. *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 9. Encyclopædia Britannica, Chicago.
- Friedman, J. B. 1974. Thomas of Cantimpré *De Naturis Rerum* : Prologue, Book III and Book XIX. *Cahiers d'Études Médiévales* 2 : 107-154.
- Friedman, J. B. 2000. *The Monstrous Races in Medieval Art and Thought*. Syracuse University Press, New York.
- Herbermann, C. G., E. A. Pace, C. B. Pallen, T. J. Shahan, J. J. Wynne (eds.) 1913. *The Catholic Encyclopedia : An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. The Encyclopedia Press, New York.
- ヘロドトス 1971『歴史 (上)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- ヘロドトス 1972『歴史 (中)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- Hewlett, B. S. 1996. Cultural diversity among African Pygmies. In S. Kent (ed.) *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers : An African Perspectives*, pp. 215-244. Cambridge University Press, Cambridge.
- ホメロス 1992『イリアス (上)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- 家入敏光 1966「ポルデノーネのオドリコ (オデリコ) 修道士の報告文」『東洋旅行記』オドリコ (家入敏光 訳) 桃源社。
- 井野瀬久美恵 2009「キリスト教ヨーロッパ世界における動物愛護思想の歴史的文脈—イギリスを例として」『ヒトと動物の関係学第1巻 動物観と表象』(奥野卓司・秋篠宮文仁 編) 岩波書店。
- 北西功一 2010「アフリカ熱帯林の社会 (2) —ピグミーと農耕民の関係—」『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』(木村大治・北西功一 編) pp. 21-46 京都大学学術出版会。
- Koch, J. 1931. Sind die Pygmäen Menschen? *Archiv für Geschichte der Philosophie* 40 : 209-213.
- マンデヴィル, J. 1964『東方旅行記』(大場正史 訳) 平凡社。
- Montagu, M. F. A. 1944. Tyson's Orang-Outang, sive *Homo sylvestris* and Swift's Gulliver's travels. *PMLA* 59 (1) : 84-89.
- 中野定雄・中野里美・中野美代 1986「解説」『プリニウスの博物誌 第Ⅲ巻』雄山閣出版。
- オドリコ 1966『東洋旅行記』(家入敏光 訳) 桃源社。
- 大場正史 1964「解説」『東方旅行記』J. マンデヴィル (大場正史 訳) 平凡社。
- 大橋博司 1976『パラケルススの生涯と思想』思索社。
- Petroff, J. 2007. Solinus, Caius Julius. in F. Skolnik (ed.) *Encyclopaedia Judaica*, Second Edition Vol. 18. Keter Publishing House, Detroit.
- プリニウス 1986『プリニウスの博物誌 第Ⅰ巻』(中野定雄・中野里美・中野美代 訳) 雄山閣出版。
- Quatrefages, A. de 1969. *The Pygmies* (translated by F. Starr). Negro University Press, New York (1887. *Les Pygmées*. Baillière, Paris).
- Ravenstein, C. G. (ed.) 1901. *The Strange Adventures of Andrew Battell of Leigh, in Angola and the Adjoining Regions. Reprinted from Purchas his Pilgrimes, with Notes and a Concise History of Kongo and Angola*. The Hakluyt Society, London.
- Romer, F. E. 1998. *Pomponius Mela's Description of the World*. The University of Michigan University Press, Jackson.

Stadler, H. (ed.) 1916. *De Animalibus Libri XXVI, Buch 1-12, Albertus Magnus (Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters 15)*. Münster, Aschendorff.

Stadler, H. (ed.) 1920. *De Animalibus Libri XXVI, Buch 13-26, Albertus Magnus (Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters 16)*. Münster, Aschendorff.